

「アジア」を語るということ

— 1980年代以降の竹内好論 —

佐藤美奈子

概要

本論文は、1980年から現在に到るまで日本国内で発表された竹内好論を概観し、そこに見られる議論から同時代日本の問題意識を探ろうとするものである。戦後、「アジア」「日本」「民族」などを積極的に論じた竹内好は、その死後も多くの論者によって取り上げられ続けてきた。本論では、これらの竹内論を年代順に取り上げて分析し、その論調がどのように変遷してきたかを明らかにする。具体的には、戦中・戦後日本が主要な問題関心にあった80年代から、ナショナリズム論と中国の変容に直面する90年代、そして世代交代の中で新たに政治性が発見・喪失される2000年以降の竹内論を比較しながら、戦後日本において「アジア」という問題がいかに語られるか、それと関連して「日本」「ヨーロッパ」がどのように位置づけられるか、その中で「政治」や「個人」がどのようにあるべきかといった問題がいかに論じられたかを明らかにする。

キーワード

竹内好, 戦後日本, アジア論, ナショナリズム論, 思想史

はじめに

竹内好は奇妙な思想家である。彼は研究者であったが、専門分野で継承されるべき研究業績をそれほど多く遺してはいない。時事的問題に関する評論を数多く執筆したが、それらの多くは時代と共に色あせる宿命から逃れられてはいない。ならば時を経て次第に彼は忘れ去られつつあるのかと言えば、それも実情とは異なる。思想家竹内好の名を我々はいまだしばしば耳にするし、そこに意味を発見しようという試みも絶えることはない。

では何故、時代の中で古び、忘れ去られかねない危険性を抱えつつ、竹内の思想は注目

され、論じられ続けてきたのだろうか。答えは様々考えられるし、その中のいくつかは読者にとって自明かもしれない。たとえば、その中国現代文学研究の泰斗としての立場、戦中・戦後を通じてのアジアへの着眼、それと抱き合わせで展開された日本論。これらはすべて現代的な意味を持つし、だからこそ竹内は少しも古びなどしない。その思想の意義を説くこれらの論は、至極もっともなものである。

しかし竹内が他の思想家と一線を画すのは、上記のような極めて「もっとも」な論が、時に独特な論法で語られるところにあるのではないだろうか。ここで言う独特な論法とは、竹内の論と等しく、時にはそれ以上に竹内好という存在そのものが思想的問題であり思想的課題である、といった語られ方を指す。たとえば、「思想としての竹内」（松本 [1980.10 : 82]）、「問題としての竹内好」（代田 [2001.6]）、「竹内好という問い」（孫 [2005.5]）といった問題の取り上げ方は、場合によっては異様なものに映りかねない。ところが竹内を論ずる場合、これらは比較的すんなりと受け入れられてしまう。

そしてこうした独特の論法によって照らし出されるのは、竹内の論そのものというよりその問題提起が有する意義であろう。そもそも竹内は問題提起型の思想家であった。提起された問題に解を与えるより、自らが生きる時代の中で問題とされるべきことを見つけ出し、それに形を与え、人々の間に投げ出すことを得意とした。上述した中国、アジア、日本に関する問題はその典型例と言えるし、文学と政治のあり方、個人と政治の関係など、竹内が提起した問題は他にも数多ある。そしてそれは国民文学論争やアジア主義に関する議論などを引き起こし、社会に大きな影響を与えた。しかもそれらの問題のうちいくつかは、竹内の死後も切迫した問題であり続けた。

ここで興味深く思えるのは、竹内自身がそれらの問題提起に対して示した解が、その問題提起ほどには精彩を放たない点である。時にひどく曖昧であり、時に強力な思い込みに支えられた竹内の論は、時代的制約という限界もあり、現時点から見るとひどく的外れな結論を示すことも多い。竹内の論が「色あせて」見える瞬間は、それが抱えるこのような限界に起因している。

ところが皮肉にも、こういった限界を有することが、逆に思想家としての竹内の意味を際立たせている面もある。確かに竹内は自らの問いに十分に答え得なかった。だが他の論者も、竹内の投げかけた問題に答えられてはいない。よってそれは、竹内や他の論者たちの力量不足を示すというよりは、竹内の投げかけた問題がそれほど重く、困難なものであったことを示すものに他ならない。そしてまた、その問いが忘れ去られることなく、繰り返し問われ続けていることは、竹内の問いが普遍的課題を示しているからと解釈することもできるだろう。未解決のまま時代を超えて引き継がれることにより、竹内の問題提起は逆に深刻さを増し、その意義を再確認され続けることとなった。そしてだからこそ、竹

内の思想が一面では「古びる」定めを逃れられていないにもかかわらず、その名は問題提起と結びつけられ、取り上げられ続けることとなったのだ。

本論は、1980年から現在まで、竹内好の遺したこの問題提起にどのような解が示されるかについて、簡単な記録を試みようとするものである。1910年に生まれ、1977年に亡くなった竹内は、中国近現代文学の専門家として同時代の中国文学を日本に紹介するとともに、中国、アジア、日本、そしてその他多岐にわたる問題に関して評論活動を行った。上記の「問題提起」はこの多彩な活動の中で、意識的・無意識的になされたものであり、時に明確な、時に曖昧な形をとって現れる。この多様な問題群の中から何を問題として拾い出すか、どのような形で取り上げるかは、各論者の問題関心に強く依存する。それはとりもなおさず、各論者の背後に存在する同時代的状況や関心を映し出すものだろう。それがどのように推移していくのか、スケッチを描くことにより、本論は同時代史としての竹内好論を明らかにしていきたいと思う。

本論で検証の対象とする論は、基本的に1980年から現在まで、日本国内で執筆されたものとする¹⁾。分析開始期を1980年としたのは、竹内の死とそれに続く追悼文の大量生産が一段落し、歴史としての竹内好を論じる準備が整う区切りの年として、1980年が、適当と思われるためである。『竹内好全集』の刊行が1980年9月から始まっていることも、その「歴史化」を象徴する出来事の一つと言えよう²⁾。また論の主旨に鑑み、竹内に触れてはいるがその思想分析を主眼としないものは検討の対象から除外した。

1. 80年代の竹内好論

1980年代、竹内は定期的には人々に取り上げられ、論じられる。ただし、その試みはどちらかと言えば散発的なものであり、それぞれの竹内論はあまり相互に参照されることなく、独自に議論を展開している。竹内が亡くなって間もないこの時期、彼が生前有していた影響力がまだ生々しく残存していたのだろう。その乗り越えを試みたり、意義を拾い出したりする作業の中で意識されるのは、他の竹内論というよりも竹内本人であった。議論が個別に行われる傾向が強かったのは、このためではないかと思われる。

この中でも、「乗り越え」という点で注目すべきは、溝口雄三による「中国の近代」を

1) なお1980年以前の竹内論については、しまね [1978.5~12] を参照のこと。

2) ただし、本論では『竹内好全集』月報を検討から除外した。論者によって温度差があるものの、筆者の死後間もない時期に編纂・出版された全集の月報においては、個人を歴史的存在として対象化し、検証するという志向性が弱まる可能性が高いと考えたためである。

見る視点」である³⁾。1980年10月、『竹内好全集』出版開始期とほぼ時を同じくして連載を開始したこの論は、竹内を戦後中国研究という文脈の中で取り上げ、論じたものであった。

溝口はまず、戦後の中国研究を以下のように総括する。

わたくしたち戦中・戦後育ちの中国研究者のほとんどの研究起点は、中国を批判するところにはなかった。むしろ中国に批判的かつ蔑視的でありそのためおのずと中国侵略に加担することにもなった戦前戦中の、たとえば津田左右吉氏らの近代主義的中国観を、否定的に批判もしくは排除するところこそが起点であった。(溝口 [1980.10~1981.1:3])

改めて説明するまでもないことだが、1945年の時点で、日本はその世界観を根本から作り直す必要に駆られた。特にそれまで植民地として支配してきた、もしくは支配しようとして戦ってきたアジア諸国に対して、いかなる態度を、視座を取るかという深刻な問題に、人々は直面することとなる。戦後、中国を研究しようと志す者にとって、特にこの問題は切実であった。だがその切実さが先人の批判に向かい、そして中国を批判的に検証するという視座が欠落する結果につながったと、溝口はここで指摘する。

このような傾向に決定的影響を与えたものが、竹内の論であったと溝口は言う。上記の引用に続けて、溝口は以下のように書く。

その場合、その有力なよりどころの一つが、たとえば竹内好氏の「魯迅」や「中国の近代と日本の近代」にみられる中国観であった。それは日本のいわゆる脱亜的な近代主義を自己批判し、その反面その対極におしやられていた中国にかえてあるべきアジアの未来を憧憬したものであり、端的にいうならばわたくしたちの中国研究の起点には基本的にこの憧憬が、まずあった。(溝口 [1980.10~1981.1:3])

中国を蔑視する立場から憧憬する立場へ。戦後中国研究のこの転換点を形作った代表的な論が、竹内の「魯迅」や「中国の近代と日本の近代」であったのだ。そして、この中国

3) 溝口雄三「『中国の近代』をみる視点」は、1980年10月から翌年1月まで雑誌『UP』に掲載され、その後、1989年6月発行の単行本『方法としての中国』に再録される。ただ、溝口は再録の際に多少の修正を加えているため、この二つでは文章が異なる部分も見られる。だが大筋の論旨に変更は加えられていないので、本論ではこの二つを基本的に同じ論文とみなし、それぞれを区別して取り上げることはしない。また引用については、基本的に『UP』版からとするが、必要に応じて『方法としての中国』版にも言及することとする。

に対する憧憬が、日本に対する自己批判と抱き合わせになっていたと、溝口は述べるのである。

溝口は竹内のこのような論理構造が、そしてそれに基づいた戦後日本の中国観が、一定の意義を有していたことを認める。特に、中国蔑視を当然のこととし、それと連動する形で植民地化が進められた近代日本の歴史を振り返れば、「その自己否定的構造は少くとも戦後二十年間、歴史的にみてかえって積極的な意義を持つものであった」（溝口 [1980.10～1981.1:3]）。

しかし1980年の時点で溝口は、竹内の論理構造が抱える限界を問題化する方向へと踏み出す。

が同時に「中国の近代」との関係におけるそのような自己否定的な憧憬構造が、わたくしたちの反脱亜的・反近代主義的なまたはアジア主義的な主体を、主観的なしたがって脆弱なものにしていたこともまた否めない。わたくしたちは中国の近代を歴史的に客観化しえておらず、そしてそれは日本の近代を歴史的に客観化しえていなかったことと裏腹であった。（溝口 [1980.10～1981.1:4]）

溝口がここで批判するのは、竹内をはじめとする戦後中国研究者達の中国認識である。彼らは中国をありのままに見るよりもこちらの立場や問題意識を中国に投影しており、結果としてその中国像は極めて主観的なものとなった。その意味で戦後中国研究者の中国認識は、彼らの批判してきた戦前・戦中の認識と構造的にほとんど変わっていないことになる。そして何より問題なのは、彼らがそれ故に日本を客観視することにも失敗し、「アジア」という文脈の中で日本を確立できずにきたことなのである。

溝口のこのような竹内批判・戦後中国研究批判は、単なる先行研究批判というより複雑な含意を持つものであった。なぜならそれは、1980年代初頭に日本の中国研究者が直面していた困難を反映するものであったからだ。1977年、竹内の死とほぼ時を同じくして中国では文化大革命が終焉を迎える。文化大革命とは1960年代後半、中国に起こった政治的・文化的な闘争を指すが、同時代日本の中国研究者はこれに対してほとんど批判的視座を持たず、むしろ「憧憬」の眼差しを向けていた。もちろん「憧憬」を抱くに到ったのは溝口が説明しているように理由のあることであったし、国交断絶期の限られた情報では正確な判断が難しかったという事情もある。だが文革終焉後徐々に明らかになった文革期中国の実情が、彼らの「憧憬」を裏切るものであったのも事実である。この現実に批判的眼差しを向けられず、結果として中国で起こった悲劇を追認した自分達は、自らの批判してきた戦中中国研究者達とまったく同じ過ちを犯したのではないだろうか。この重い問い

に、この時期の中国研究者は直面していたのだ。

今日あらためて中国問題について発言しようとした場合に、戦前における発言がもつ「戦争責任」といったものの重さと同様に、戦後なかならず「文革」10年間の発言にともなう「戦後責任」といったものの重さといったことについても、無自覚であってはならない。(野沢 [1985.10:33])

1985年、溝口とほぼ同じ主旨の竹内批判を行う中で野沢豊から出たこの言葉は、この時期の中国研究者が抱え込むこととなった二重の困難を示すものと言えよう。「中国革命に触発されて中国研究の道に入った一人」(溝口 [1989.6:4])と自身を語る溝口もまた、その困難を自ら引き受けねばならないことを自覚している。よってその竹内批判は単なる他者批判や先行研究批判としてだけでなく、痛烈な自己批判としても展開されていたのだ。

以上の溝口による竹内批判は、中国研究という文脈においてのみならず、近代日本を考える上でも重要な問題提起を行ったように思われる。なぜならそれは第一に、近代日本は現在に到るまで一度たりとも正面から中国に向き合ってはこなかったのではないかと問いかけるものであり、第二に、日本はアジアという文脈の中で自己を確立してこなかったのではないかと問いかけるものであったからだ。日本を主な関心事とする論者がこれにいかにか答えるかは興味深い問題となり得るだろう。しかし、彼らが溝口の問いを正面から取り上げた形跡は、少なくともその竹内論の中には見当たらない。第一の問いは言及されること自体が少なく、第二の問いは「アジアの中の日本」というより広い、それ故に拡散しがちな問題設定に置きかえられがちである。

こうしたすれ違いが生ずる原因は様々に考え得るが、その一つとして日本研究者と中国研究者が異なる文脈で竹内を取り上げたことが挙げられるだろう。中国研究者が主に中国研究という文脈で竹内を問題化する一方で、日本研究者は戦後(もしくは戦中)日本思想史という文脈の中で竹内を取り上げることが多い。これは中国研究者が竹内の「乗り越え」を試みるのに対し、日本研究者はその再評価を主眼に置くという論調の違いを生むことともつながっている。ただし、この二つの問題関心が互いに全く無関係なものでないこともまた明らかだ。溝口の例からも分かるように、中国研究という文脈は戦中・戦後日本の問題と密接な関わりを持っている。また戦中・戦後日本思想という文脈の中で、中国・アジアというファクターが重要な役割を果たしたことも確かだ。このように互いに連関しながらも微妙にすれ違う問題関心の中で、竹内はどのように語られるのか。次に、日本研究者の手による竹内論を見ていくことにしよう。

1986年3月に発表された「戦後思想と竹内好」の中で、日本思想史を専門とする松本

三之介は、竹内を以下のように位置づけている。

竹内好は戦後思想がその出発にあたってみずからに課した根源的な課題を、すぐれて自覚的に、しかもきわめてドラマティックな表現の下で、一貫して追求した思想家であった。戦後思想がみずからに課した課題とは、日本の思想を、まさしく思想の名にふさわしい、創造性ないし生産性をそなえた、活力ある観念形態につくりかえるということである。(松本 [1986.3:225])

これは竹内を、戦後日本思想史という文脈の中で取り上げる代表的議論と言えるだろう。ここで松本が問題として念頭に置いていたのは、溝口よりも一段階前の戦中日本である。よく知られるように、その時期の日本では思想が積極的な意味を失い、知識人の多くが体制追従に墮していった。このような過去をいかに乗り越えるかという問いは、戦後日本のすべての知識人に共通するものだったと言って良い。竹内はその中でも、思想を「活力ある観念形態につくりかえ」ようと果敢に試み続けた思想家であったと松本は位置づける。よって「[手軽く取替えられる季節の衣]ではなくして、文字通り担い手の「血肉」となる思想の形成はいかにして可能か」(松本 [1986.3:226])という問いに竹内がどの様に答えるかが、松本にとっては問題となる。なぜなら、それは戦中日本が抱え込んだ課題を突破する糸口になり得るからである。

そのために松本が行ったのは、竹内の思想の中にある「普遍性」に注目することであった。これは竹内に対して一般的に取られるアプローチとは、やや異なるものであろう。民族・国民・アジアなど、むしろ「普遍性」と対立する概念を積極的に取り上げたのが、竹内の特徴であり意義とするのが一般的な評価だからである。松本はこれに対し、竹内の思想が普遍性への志向に裏打ちされていることを示し、そこから新しい竹内論を展開しようとした。

たとえば竹内の「民族」という概念について、松本は以下のように述べている。

「自由の意識」が実践的な力として現実化されるためには、「民族」という主体概念を必要とするというのが竹内の基本的な認識であった(松本 [1986.3:229])。

民族の意識こそが、知識人と民衆との間でともに所有し、相互に交流しあうことのできる唯一の現実的な生活意識であり、思想と生活とを結びつける媒体としての働きを果たしうるものと考えられた(松本 [1986.3:230])。

つまり竹内が「民族」を持ち出したのは、「自由の意識」を実践的なものにするための

基盤、もしくは民衆と知識人の結びつきという普遍的課題を達成する契機としてである。それによって排他的な同族意識を高めようとしたわけではない。

竹内の「アジア」についても、松本は同様に普遍性に着目した解釈を行う。もちろん、竹内にとってアジアとは「ヨーロッパに対する対抗概念であり、ヨーロッパへの抗議の意思と抵抗の決断を内に含んだ概念」（松本 [1986.3:233]）であった。だが「彼はヨーロッパとアジアを対立概念として捉えたが、両者の間に人類的な等質性の存在することまで否定するものではなかった」（松本 [1986.3:233]）、と松本は強調する。つまり「両者の間には共通の時代が生み出した文化価値が等しく支配すべきもの」（松本 [1986.3:233]）と、理解されていたのである。

このため、松本の論の中で、竹内のアジア論は二重の意味を持ったものとして提示される。

ヨーロッパの拡大に対するアジアの「抵抗」とは、単にアジアの「自己」をヨーロッパの自己拡大に対して擁護するというのではなくて、じつは自由や平等という価値の全人類的な貫徹という、まさに非ヨーロッパにして初めて認識が可能な新しい文化的使命を担うものであり、またそうでなければならなかった。（松本 [1986.3:234]）

竹内は、「自由や平等というヨーロッパ文明の生み出した文化価値」を「文字通り「全人類的に貫徹するもの」とするために、「アジアの原理」を持ち出したのだ（松本 [1986.3:237]）。こう解釈することにより、竹内の論が「アジア」以外の要素を排他的に拒否しようとするものでも、また「アジア」に特権的意味を付与しようとするものでもないことを、松本は示したと言える⁴⁾。

穿った見方をすれば、この松本の論は溝口の竹内批判に対する婉曲な異議申し立てと見ることもできるだろう。溝口は竹内を批判する中で、中国は「ヨーロッパとも日本とも異なる歴史的に独自の道を、最初から辿ったのであるし、今でもそうなのである」（溝口 [1980.10~1981.1:8]）と主張していた。これは日本が自身の主観を通してしか中国

4) 松本と同様に、竹内の思想に内在する普遍性に注目する論者に鶴見俊輔がいる。大東亜戦争中の竹内を念頭に置きながら「竹内好の過失から学びたい」（鶴見 [1983.3:236]）とする鶴見は、松本同様「戦中日本」を最大の問題として取り上げる論者と言えるだろう。だがこの鶴見も、竹内の思想の根幹にあったのは「ナショナルなものとむきあうコスモポリタンな個人」（鶴見 [1995.1→2001.3:294]）であって「ナショナルなものをとおしてインタナショナルなものへという方向」（鶴見 [1995.1→2001.3:294]）とは異なると言明する。これは竹内の思想が単なる共同体主義・地域主義を志向するものではなく、「コスモポリタン」を前提とするものであるとすることによって、ある種の普遍性を竹内の思想に見出すものと言える。

を見てこなかったことへの批判であると同時に、日本の主観の中で評価基準としてヨーロッパが重要な役割を果たしてきたことを問題化する含意もあったと言えるだろう。竹内は確かに中国の「非ヨーロッパ性」を高く評価し、そのことによって戦後日本の知識人に大きな衝撃を与えた。だが、その「非ヨーロッパ性」評価は「あくまでヨーロッパを基準にしての、いわばヨーロッパの反作用としての「非」であるという点で、ヨーロッパから自由ではなく、だからそれ自体としても自立していない」（溝口 [1980.10~1981.1:29]）と溝口は批判する。「アジア」を掲げる竹内の論の根幹にはやはりヨーロッパ中心主義が潜んでいる。それを指摘することで、溝口は戦後日本の「アジア」認識を問題化しようとしていたのだ。

これに対して松本は、竹内の思想がヨーロッパを参照しながらも、それを突き抜ける普遍性を志向していたのだと意味づけ直す。ヨーロッパに由来する普遍性は、ヨーロッパ中心主義をも破壊する可能性を有している。それを踏まえて「アジア」を論じる竹内を、「アジア」であれ、「ヨーロッパ」であれ、特定の地域に縛り付けて論じようとすることは、その本質を見失わせることになる。松本は溝口を含めた多くの竹内論に、このような警句を発していたように思われる。

改めて「中国」そして「アジア」に正面から向き合う必要性を強調して竹内を批判する溝口と、そうした特定の地域に固執する思想を乗り越えようとした竹内を評価する松本の論は、奇妙な形で対峙していると言えよう。しかし、溝口の論に対する婉曲な批判となっている松本の議論に対してもまた、いくつかの疑問を投げかけることが可能であろう。たとえば、「中国やアジアと向き合う」ことに対して溝口が行った真摯な問題提起は、結局松本の論では取り上げられていないのではないのか。むしろ普遍性を語る中で、「アジア」（もしくは中国）と向き合うことが、再び回避されてはいないか。更にはまた、「西欧」と「普遍」はそれほど簡単に切り離せるものなのか。この二つの分かれ難さこそが、近代世界の認識を形作ってきたものではないのか。

興味深いことに、この「アジア」をいかに語るかという問題と「西欧」と「普遍性」という問題は、80年代の竹内論の中でそれぞれ大きなトピックとなっている。前者に関して言えば、同時代的状況の中で竹内の「民族」「国民」「アジア」という概念は積極的意味を有すると論じられることが多かった。文芸評論家の磯田光一は「戦後ナショナリズムの帰趨を問おうとするとき、竹内好における「民族」または「国民」がアメリカのアジア戦略への対立項として提出されていることに注目しなければならない」（磯田 [1983.9:171]）と述べる。つまり、「『国民文学論争』における「国民」の概念が、日米安保体制という名の間接占領へのアンチ・テーゼとして提出された」（磯田 [1983.9:171]）と、ここでは捉えられているのである。そしてこういった立場から磯田は、竹内の「国民」「民

族」論とアジア主義論を以下のようにつなげる。

軍国主義という名の「近代主義」のうしろにある民族意識の本質は、岡倉天心らのアジア主義を媒介として、西欧に対抗しようとするアジア・ナショナリズムの問題に通底する。そして竹内好においては、こういう局面にあらわれる反西欧的なナショナリズムは、その可能性としては中国革命やインド、ベトナムなどの反植民地闘争と二重うつしになるのである。(磯田 [1983.9:171])

このような磯田の竹内観は、「必要悪としての安保体制」(磯田 [1983.9:174])を甘受する同時代日本に対する磯田自身の憂いから生じたものと言えるだろう。そして、だからこそ「植民地化への抵抗を放棄した近代日本への、竹内好の全面否定にちかい呪詛」(磯田 [1983.9:175])に強い共感が示されている。ここでの「アジア」「ナショナリズム」は「西欧」「帝国主義」に対するアンチ・テーゼとしての意味を強調されたものである。

近代日本史を専門とする上村希美雄も、1986年に発表された「戦後史のなかのアジア主義——竹内好を中心に」の中で、竹内の思想を「反帝・反植民地を軸とするアジアのナショナリズムが、非同盟・中立を掲げて世界の冷戦構造に挑戦した当時の情勢を明らかに反映するもの」(上村 [1986.11:46])と捉えている。そもそも上村は、竹内が戦後発表した「中国の近代と日本の近代」論文が「占領下の日本に新しく生まれたアジア主義の思想的基底を定めるものとなった」(上村 [1986.11:44])ことに注目して、そのアジア主義の内容を次のように述べていた。

明治以来の近代化コースの再現を拒否し、アジアの民衆と同じ痛みをわかちもちながら、抵抗主体としてのアジア、すなわちヨーロッパ的体系とは別個の世界性を要求する主体としてのアジアをみずからの内部に構築すること——これが竹内のアジア主義思想の核心である。(上村 [1986.11:45])

一方で、上村は竹内がアジア主義に込めた意味を以下のように推測してもいる。

独断を恐れずに言えば、〈アジア主義とはついに国家の廃絶をふくむ永久革命を志向する理念である〉——これこそが竹内が発しようとして発しえなかった一言であり、彼自身が望むアジア主義の理想型ではなかったか。(上村 [1986.11:47])

以上、日本を主な関心とする論者は、主に戦後日本思想という文脈の中で竹内を積極的に評価する傾向が強かったことを示してきた。これは、先にあげた中国研究者による竹内乗り越えの試みとは興味深い対照をなしているように思われる。

しかし80年代も終わりに近づいた時に、「西欧」と「普遍性」というもう一つの問題の方向から竹内論が出る。1987年に発表された酒井直樹の「近代の批判：中絶した投企——ポストモダンの諸問題」である。ポストモダンと呼ばれる新しい思想的潮流は、西洋近代への問い直しを中心的課題の一つとしていた。デイビッド・ポロックや高山岩男と並べて酒井が竹内を取り上げたのは、「近代」「西洋」「東洋」という問題を竹内が自覚的に取り上げた論者であったからだろう。

竹内は、東洋の近代は西洋の侵入に抵抗することによって、初めて生まれたと主張している。近代日本批判として展開され、理解されてきた論を、酒井はまったく異なる視点から批判してみせる。「転向文化」と評され、西洋に対して「抵抗」することもなく、「何者でもない」とする竹内の日本批判は、逆に、強固な国民的同一性をもって他国を虐げた歴史を隠蔽する役割を果たしていると言うのである。「問題は竹内の考えたのとは逆であって、日本はあまりにも強固な国民的同一性をもってしまったために、不可避免的に自己拡張の道を歩みはじめたのである」（酒井 [1987.12→1996.5:44]）と、酒井は述べる。

その上で、酒井は次のような竹内理解を示す。

竹内は、相互的で対称的な認知の関係を西洋と非西洋の間にうち立てたいのだろうか。近代が窮極的な理想的社会関係として定立した相互認知へと、歴史が最終的にわれわれを導いてゆくと信じたのであろうか。全人類の解放の信念を放棄しないという点からいえば、竹内は確実に近代主義者であった。だからこそ彼は一元的世界史は結局は不可避であり、全人類の解放は西洋によってではなく東洋によってなし遂げられると信じたのである。彼は、歴史において窮極の主体は東洋であるという。だがそれまでは、歴史の主体としての国民を創出するために異質性の消去という事態を堪えなければならぬのだ。（酒井 [1987.12→1996.5:45]）

この意味で、竹内は反近代主義者ではなく、その近代化批判も限られた側面に向けられているのにすぎないのだ。

だが、このような批判を行った上で、酒井は竹内の「抵抗」論にもう一つの可能性を見出す。それは上記とは逆に、「抵抗とは自己と自己像を結び付けている表象関係を攪乱するもの」（酒井 [1987.12→1996.5:49]）であり、「ひとびとをものもろの制度に従属させる種々の同一性の形勢を拒絶する何かのこと」（酒井 [1987.12→1996.5:49]）である。

しかも、「抵抗は人びとを解放しない」（酒井 [1987.12→1996.5:49]）。この竹内の認識を、酒井は高く評価する。そして、以下のように竹内を評価する。

竹内好は近代を肯定的にみるにもかかわらず、近代に対する批判的態度を失うことはなかった。この批判は彼のこうした抵抗観に由来し、この抵抗観こそ近代を超克する可能性を単純に信じた者と竹内をはっきりと区別している。近代主義に深くコミットしていたにもかかわらず、近代に対する有効な批判を展開し得たのは竹内が解放のイデオロギーを拒絶したためであった（酒井 [1987.12→1996.5:49]）。

最後に現れたこの酒井によるこの竹内論が、90年代における竹内論の基盤をなすものであった。

II. 90年代における竹内好論

90年代に入ると、竹内に関する論はいったん減少し、95年頃に再び増加に転じる。この減少と増加については様々な解釈が可能であるが、とりあえずここではその境目にある1995年という年に注目する。周知の通り1995年は第二次世界大戦終結を日本が迎えてからちょうど50年目にあたり、これを節目、記念、回顧の年と捉える動きが社会では盛んになった。これは戦中・戦後の日本、広くは近代日本に対する問い直しを動機付けると同時に、「戦後日本」を一つの歴史区分として切り離し、研究・論争の対象とする効果ももたらした。こういった状況の中で戦中・戦後を代表する思想家竹内が注目を浴びるようになったことが、竹内論の増加の一因であると考えられる⁵⁾。

「回顧」というこの時期の特徴を最もよく反映しているのは、中国研究者の手による二つの論文であろう。1995年に発表された今井駿の「竹内好の中国論について」、1996年に発表された坂井洋史の「竹内好と「文学」の断層」では、それぞれ竹内の議論を内在的に批判し、乗り越えることに力点が置かれている⁶⁾。たとえば、中国近代史を専門とする今

5) ただし、竹内論の増加と減少については異なる解釈も可能である。たとえば代田智明は、80年代に溝口雄三の論の影響により竹内への関心が薄れ、90年代に酒井直樹など竹内に注目する研究者が海外で増加したことが日本国内での関心を復活させる、という図式を示している（代田 [2001.6:299-300]）。だが、竹内好論の発表数という点から言えば、その減少は90年代前半の現象であって、80年代的現象ではない。溝口・酒井の論が再録された単著の出版年を鑑みると、代田の図式にもそれなりの妥当性を認めることができるが、それでも竹内論の増加に日本国外での議論がどの程度の影響力を有したかについては検討の余地があるだろう。

井は溝口・野沢の竹内批判を引き継ぎ、更に徹底してこれを展開すべきことを主張する⁷⁾。また中国近代文学を専門とする坂井は、「客観性」という「毒」の蔓延に危機感を示しながら、自らの関心が「竹内自身、遂には毒に中って、己が奉じる「文学」を隠蔽した、或る種「挫折」の在り様」(坂井 [1996.6:29])にあるとしている。

今井と、中国近代文学を専門とする坂井では、それぞれ取り上げる内容も、論法も、着眼点も全く異なる。しかし、それぞれの専門分野で内在的批判を行いながら竹内を乗り越えようという姿勢は変わらない。そして彼等のそういった試みを裏付けているのは、同時代中国の変化に対するぼんやりとしたとまどいである。

たとえば今井は、中国の同時代的状況を若干の慨嘆を込めながら以下のように描写している。

その後、時代は変わって、社会主義を国是とする国は、中国のほか世界にたった3つとなってしまった。その中国はこんにち、竹内が恐れた「すべてのものを取りださうという信念」もなく、プラグマティックに「開放」・「改革」路線を歩みつつある。このような近時の世界の動向を「西洋の没落」と見ることも「アジアへの回帰」と見ることも、どちらにも無理がある。ただ一つ疑いえない事実は、「近代化」=資本主義化の運動がますます大がかりに地球を喰い潰し汚しつつあるということである。(今井 [1995:132-3])

こうした時代変化の中で、「中国」を論じる視点を今井は模索し、「文学」の意味を坂井は模索した。どちらも、竹内を乗り越えた先に「中国」や「文学」に対する新たな視点を求めた論と言えよう。80年代において中国研究者たちが竹内の乗り越えを試みたことについては既に述べたが、今井や坂井の論もこれに連なるものと言える。

一方で日本を主な関心とする論者(もしくは中国を専門としない論者)の竹内論には、大きな変化が見られる。80年代において日本を専門とする論者が、基本的には竹内を肯定的に評価する傾向が強かったことについては前に述べた。しかし90年代になると、竹内に対して極めて批判的な議論が彼らの間でなされるようになる。そこで大きな役割を果たしたのは、ナショナリズムというトピックの出現であった。

たとえば大澤真幸は、「多くの戦後知識人は、戦前の偏狭なナショナリズムに、普遍主

6) 坂井の論が、当初、「戦後50年の中国研究——回顧と展望」と題されたシンポジウムで発表されたものという事は、象徴的である。

7) 今井は本文中、以下のように述べている。「しかし、「美化してとらえる」竹内の論理を批判的に吟味しておかなければ、単なる「結果論」に終わってはしまわないだろうか。「文革」体験の総括のためにも、この作業は必要かと思う」(今井 [1995:112])。

義的な原理を対置することによって、日本の悲劇は乗り越えられると考えた」(大澤 [1995: 28]) のに対し、「過剰な普遍主義への展開に対する反措定」(大澤 [1995: 29]) を意図して竹内が特殊主義 (= ナショナリズム, 国民主義, 民族主義) を主張した点には一定の意義を見出している。この意味で、竹内にとって「ナショナリズムというのは、自己を絶対化する原理ではなく、第一義的には絶対化する自己を否定する他者を確認する原理」(大澤 [1995: 29-30]) なのである。

だがその上で、こうした普遍性否定の論理が、結局は共同体に依拠してしか主張され得ないところに大澤は竹内の限界を見る。「徹底した否定の行動が、結局は、このような積極的・肯定的な根拠地としての共同体を必要とするならば、それは、当の共同体の内部で、自由を先見的に制限する単純な特殊主義へと転化してしまうのではないか？」(大澤 [1995: 30]) と、大澤は問いかける。つまり、「自由は、一般には純粹でありえず、なんらかの程度において奴隷であること——拘束に従属していること——を前提にして、構成されている」(大澤 [1995: 25-6]) という側面を捉え切れなかったのは、竹内も他の戦後知識人と同じであり、この意味で彼らと同様の問題を竹内も抱え込んでいたと大澤は説くのである。

大澤の議論は、竹内の述べるナショナリズムが単純な「自己を絶対化する原理」ではないことを強調している。この意味で、竹内=ナショナリストという単純な図式によって、大澤が竹内を批判しようとしているわけでないことは明らかである。しかし最終的に大澤が問題視するのは、竹内が「積極的・肯定的な根拠地としての共同体」を結局は前提としている点である。単純なナショナリストとは一線を画す竹内が、それでもやはり国民国家の持つ暴力性に無自覚であったこと、そしてこれを肯定しかねない論を展開していたこと。これらを竹内の限界と大澤はみなすのである。

大澤のこのような論法は、一面で酒井直樹の論法を引き継ぐものであり、また一面では90年代後半に展開された竹内論の論法を先取りするものだ⁸⁾。戦後日本についての見直しが進んだこの時期はナショナリズム論が隆盛を極めた時期とも合致しており、「国民」「国家」「ネイション」などをキーワードとして新たに日本を検証する動きが盛んとなった。これは一方で「ネイション」としての日本の暴力性を暴き、それを批判しようとする議論

8) たとえば、「閉鎖的な「文壇」ないしマルクス主義的知識人共同体にこもった文学」(紅野 [1998.10: 29]) を竹内が批判したところに意義を認めながらも、それが「近代的な「国民」を前提にしており、それをしかも「国民文学」と名づけていくかぎりにおいて、境界の確定をたえず強いる言説の場をつくりあげてしまったことも否定はできない」(紅野 [1998.10: 29-30]) と批判する紅野謙介の論。竹内にとって「近代日本思想のアポリア」とは「社会革命」と結合した「正しいナショナリズム」を立ち上げ損ねたことを意味し(三宅 [1998.10b: 378-9])、その意味で「竹内の『近代主義批判』とはむしろあるべき『近代』からの逸脱として遂行されていたのではないだろうか？」(三宅 [1998.10b: 381]) と問いかける三宅芳夫の論。以上二つの論も、この系統に属するものと言えるだろう。

へと発展したが、他方では「ネーション」としての日本を再発見・再評価しようとする議論をも生み出す。後者の代表としてあげられる自由主義史観は、戦後日本では自国の歴史の「負」の側面が過剰に強調されたと批判し、従来とは異なる「正しい」歴史教育を行うことを主張して大きな話題をよんだ。そしてこれはまた、国民国家の問題性と暴力性を明らかにしようとする前者の動きを加速させることになる。竹内はこうした動きの中で、戦後日本や戦後日本思想を代表する象徴として再検証されることとなった。

1998年5月に発表された川本隆史の「民族・歴史・愛国心——『歴史教科書論争』を歴史的に相対化するために」には、これが最もよく現れている。川本は、太田昌国が「『自由主義史観』は、私たちが依拠してきた歴史観とはまったく別の世界で通用しているだけの妄説なのか」（川本 [1998.5:158]）という問いを投げかけた上で、竹内好の「日本人のアジア観」からの引用を読み上げた講演を聞き、深い衝撃を受ける。

右の引用文を聞かされたとき私は、わが耳を疑った。竹内好や上原専祿、江口朴郎といった、私（たち）が同志なり、先達なりと仰いできた評論家・歴史家たちの近代日本の歴史叙述に、すでにかかなりの欠落・歪みが内包されている。（川本 [1998.5:159]）

自らが問題視する自由主義史観と自らが今まで依拠してきた竹内を含めた先達の論が、ある側面では極めて似通っている。川本はこの事実を痛みを持って受け止めた上で、「こうした事態を見据えながらでなければ、『自由主義史観』に対して有効な反論を展開することすらおぼつかない」（川本 [1998.5:159-60]）と述べる。ここでは、酒井や大澤などの論で竹内の「限界」として指摘されてきたものが、90年代後半の同時代的な問題に直結するものとして、改めて問題化される様子が現れていると言えよう。

このような状況の中で、「近代に対する有効な批判」たり得たとして酒井が評価する竹内の「抵抗」論に対しても、批判的検証が必要であるという指摘がなされている。鶴飼哲は竹内が京都学派の哲学の限界を指摘し、哲学に対して「アンビヴァレントな態度」をとり続けた点に共感を寄せながらも（鶴飼 [1998.6:300]）、以下のように述べる⁹⁾。

しかし、それと同時に魯迅の「抵抗」を竹内が、最終的には毛沢東の革命との歴史的連続性において理解し、中国民族の主体的自己形成の過程とみなしたとき、果たして何が失われたのか、そのとき彼が、「抵抗」を、再び哲学の、したがってヨーロッパ

9) なお、竹内の京都学派批判について、その論理内容を詳しく論じたものとして、三宅 [1998.10a] の論が同時期に発表されている。

バの言葉で思考しなかったかどうか、ていねいに検討してみる必要がある。そして、一面では「自由主義」史観にも通じかねない彼の思想の両義性と呼ばれるものが、まさにその点にかかっているのではないか。(鶴飼 [1998.6:301])

竹内は、中国を初めとするアジアに注目することにより、西洋近代を批判した思想家として高い評価を得てきた。それがこの時期には、むしろ根底では西洋近代を肯定し、それが竹内の論に限界を与えている点が注目される。これは、国民国家論という90年代的な問題関心を反映したものであろう。

このような竹内論に関して、中国文学研究者としての立場から批判を展開したのが代田智明である。ただし代田も竹内を論じ始めた当初から、上記のナショナリズム論を意識していたわけではない。1996年に北京で執筆され、1997年に発表された「竹内好と武田泰敦——二人の思想的すがた——」で代田は、竹内の論を内在的に分析しながら、その限界を示そうとしていた(代田 [1997.12])。その方法論や問題関心は、むしろ先にとりあげた坂井や今田の論と共通するものである。

しかし、日本に帰国した代田は以下のような現状を眼にすることになる。

さて人民共和国のお膝元で暮らしながら、新旧の知己たちの人情には、心温まる思いであったが、市場経済に狂奔する人々と「愛国主義教育」の過剰な宣伝とを目撃して、私はいささか辟易した。しかし一方では、そんな中国に招聘されてくる、人文科学系の日本学研究者の、他愛のない無自覚な日本主義者ぶりにも唖然となった。そして帰国した私を気付かせてくれたのは、日本国内も中国と少しも変わらないのではないかという実感なのである。(代田 [1999.2:3])

この代田の論は、日本国内のナショナリズム、中国の市場経済化という今まであがった二つの問題に触れながら、それらが無関係ではないことを示唆している。過剰なナショナリズムは日本だけの問題ではないし、中国の市場経済化とも連動する経済のグローバル化は、必然的に日本の問題ともなっていた。そして、このような立場から日本で展開される竹内論を見た時に、代田は以下のような感想を抱く。

だがいったいに、「[ナショナル・ヒストリーを] 超えて」と言いつつ、「東アジアの歴史、現在、未来を考えようとするすべての人びと」に向けられていると言いつつ、アジアという視野も、アジアへの視線もあまりはっきり見えてこない。アジアの思想的遺産、そして何より現在進行的なアジアの思想的営為に対して、あまりに無関心と

言ってよい。ここに現れた無関心さこそ、むしろ我々の想像力の貧困と思想的欠陥ではないか。(代田 [1999.2:6])

そして、以上の立場から、代田は竹内の「アジア主義、アジア連帯の思想」(代田 [1999.2:5])を「実現可能な課題としてではなく、可能性を探る思想的想像力として」(代田 [1999.2:5])としてすくいあげる必要性、また西洋／非西洋、アジア／ヨーロッパという構図を「アジアの思想的資源とヨーロッパの思想的資源を、アジアの側において捉え返す」(代田 [1999.2:11])ために「自覚的に選択する」(代田 [1999.2:11])必要性を説く。80年代初め、中国研究者の立場から竹内の「ヨーロッパ」中心主義を批判した溝口に批判的立場を取りながらも、代田が「アジア」の必要性を同じ中国研究者の立場から訴えているのは興味深いことと言えるだろう。

III. 2000年以降の竹内好論

2000年以降も竹内に関する論は発表され続けている。しかし竹内を論じる姿勢はそれまでとは異なり、ある種の冷静さと距離感を持ったものへと次第に変化してきているように思える。ここで距離感と述べたのは、竹内個人やその同時代的影響力の呪縛から離れ、歴史的人物としてその思想を論じる姿勢を指す。竹内と直接面識がなく、彼が影響力を有していた時代の実感を持たない論者・読者が増える中、同時代的状況にとらわれずに竹内の思想の価値がどこまで論じられるかが問われ始めたと言うこともできるだろう。

このような状況の中で、改めて竹内のアジア論を検証する試み(李 [2000]、松本 [2000.6])や、ポストモダンの観点からの検証を進める試み(カリチマン [2001.7])、竹内の魯迅論を検証する試み(藤井 [2002.12])、戦後思想史の中に竹内を位置づけようとする試み(小熊 [2002.10])などが行われている。同時に、竹内の思想形成過程を明らかにしようとする岡山麻子の一連の試みなども現れ(岡山 [1999] [2001] [2002.6] [2003.1] [2004.3])、思想家竹内の全体像について徐々に研究蓄積が積み上げられていることが分かる。

このような議論の中から、新しく竹内を位置づけようとする試みとして最後に二つ、丸川哲史と孫歌の論を取り上げる。丸川と孫歌は、それぞれ2000年以降積極的に竹内を論じている代表的な論者である。どちらも、竹内を直接には知らない新しい世代に属し、それ故に「戦後日本」に対して従来とは異なる距離感を有すると言えよう。そのような彼らが竹内を論ずる際、どのような点に注目するか、以下見ていくことにしたい。

まず、丸川哲史は竹内を語る上で、従来「戦後」と語られてきた時代を「冷戦」と捉え返す。そして、そうすることで竹内の思想の意義を、新しい方向から提示しようとする。

言うまでもなく、日本人は、1955年以後の時間について、それを「戦後」と名付けつつ生きてきたのであり、ほとんど「冷戦」としては生きてこなかった。冷戦構造は、その分割線の線分付近、つまり最前線でこそ、もっとも激しくその暴力を発動させ続けていた反面、前線に立たないことによって冷戦の利益が配分され、日本は一つの歴史のエアポケットに入ったとも言える。(丸川 [2002.9:6])

日本が冷戦に直接的に巻き込まれなかったのは、偶然の産物にすぎない。それにも関わらず、このように「冷戦構造に深く蔵されつつ生きていたこと」(丸川 [2002.9:6])で、戦後日本の知識人は「その分、冷戦構造を忘却すること、冷戦構造によって深い傷を負うこととなった人びとの苦しみから隔たること」(丸川 [2002.9:6])になったと丸川は批判する。だが、この「忘却」に抗い、冷戦構造を意識化し、その上でこれを乗り越えようとした稀有な思想家も存在した。それが竹内であるというのが、丸川の評価である。

たとえば、以上を考慮に入れながら国民文学論を見た時、丸川は竹内の小林多喜二論の中には以下のような隠れた試み見出せるのではないかと指摘する。

両者(日/中)は、戦争状態として一体でありつつある中で、抵抗と侵略という対称的でありつつ非対称的な関係に置かれていた。そこでは、どのような関係を結べただろうか。このような問題設定は、当時(冷戦下)の竹内においては、冷戦構造の「こちら側とあちら側」をどのように媒介して行くのかという文化的実践として、二重の相のもとに意識化されていたのではないか。(丸川 [2002.9:8])

また、「竹内の内部に抱え込まれていた「中国」との関係の絶対性」(丸川 [2002.9:10])もまた、冷戦という特殊状況が大きく影響しているという観点から説明される。

つまり、竹内にとっての「中国」(新中国)とのかかわりとは、日中戦争における敵対性の持続と、まさにその敵対性を隠蔽してしまうかのごとく「中国」が東/西冷戦の敵対者として冷戦構造の向こう側へ配置されたということ——つまり、日本と中国との間の敵対性は冷戦下において二重化しつつ、その二重性のために日本人の敵対への自覚は、むしろ封印されているという認識であった。(丸川 [2002.9:10])

竹内が活躍した時代は一般に人々の政治的関心が高く、逆にそうした同時代的状況と照らし合わせてこそ竹内の思想が意義を持つとされることも多かった。だがそれならば政治的無関心がむしろ一般的である現状では、竹内の思想に意義を見出すことも困難となるはずである。丸川は、こうした政治的無関心の背後に厳然と政治性が潜んでいることを指摘し、その上で政治性という問題に正面から取り組んだ竹内の思想をすくいあげようとしている。そして丸川はまた、そうした隠匿された政治性を体現するものとして中国を論じることにより、新しい「中国の見方」をも提示しようとしているように思われる。

2005年5月、中国出身の孫歌によって発表された竹内論は、丸川とはまた別の形で、竹内の現代的意義を示そうとしたものであった。90年代に博士論文としてその原型が執筆され、2001年に台湾で中国語版が先に出版されたこの『竹内好という問い』の冒頭で、「本書は竹内好に会うことの試みであった」（孫 [2005:xxi]）と述べる。ここで言われる「出会い」とは、単に竹内を研究対象として発見したということの意味するものではない。孫はそれを「竹内に「内在」するプロセスを経て、自分自身を竹内から「取り出」そう」（孫 [2005.5:xxi]）とする新たな学問的試みであったと説明する。

孫がこのように特異な手段を用いて竹内の分析を試みたのは、竹内の意義を一般的な学問成果は異なる次元に見出すためである。だがそれが何かについて、孫は簡潔で明晰な定義を与えようとはしない。むしろ竹内の論理構成とその背景を明らかにしながら、その意義を少しずつ炙り出していくという手法をとっている。その多岐にわたる議論をここでは紹介できないが、一つ注目すべきことがあるとすれば、それは孫が竹内の「崩す」という側面に注目していることであろう。例えば、「まえがき」の中で、孫は竹内の意義に触れ、以下のように述べている。

もしも竹内を今日に蘇らせることに意味があるとすれば、それはなによりもまず「観念」の安定性を崩し、歴史的にそれを相対化するところにあるに違いない。（孫 [2005.5:xxi]）

竹内好によって考えさせられる問題はさまざまであるが、おそらく根本的なのは、このような単純な価値判断を崩し、複雑な歴史的感覚を確立する必要があるということである。（孫 [2005.5:xxv]）

竹内は従来あった制度や思想、そして概念や言葉までもを根底から問い直し、いったん破壊することによって、新しく「複雑」で「相対化」された価値・観念を生み出すことができた。孫はこのように主張する。

ここで興味深いのは、孫の注意が「崩す」という行為の結果にではなく、「崩す」とい

う行為そのものに向いている点である。本論の中で孫は繰り返し竹内の「自己否定」に言及するが、これはこの「崩す」ことへの着目から生じたものと言えよう。「自己否定」や「掙扎」によって自己を洗い、洗われた自己を再びその中から引き出す（孫 [2005.5: 94-5]）というモチーフは竹内の中で生涯重要な役割を果たしており、だからこそ彼が「複雑」で「相対化」された結論に到達することができたと言っている。その結論自体に意義があることを孫は否定するものではないが、それは「複雑」で「相対的」であるからこそ、常に変動していく性質も有している。よって「論争それ自体ないしその結果は、竹内が残してくれた時代を乗り越える精神遺産と比べれば、むしろ取るに足りないものだと言ってよい」（孫 [2005.5: 112]）といった評価が行われることとなるのだ。

そしてこのように竹内の「崩す」「否定」「流動」という面に注目する孫の論では、他の論者が注目してきた「中国」「アジア」「日本」という概念にさほど注意が払われない。「竹内にとって、これら一連の概念は出発点でもなく到達点でもなかった」（孫 [2005.5: xix]）と述べる孫は、それらの概念が否定され、再構成される過程の方を重視する。

竹内は自身の研究対象である「中国」に入っていく、全身全霊でそれを体験し、感受し、理解しようとした。と同時に、不断に研究対象の中から「自己を選び出し」、自身が中国化されることも、中国を抽象化したり記号化したりすることも拒否したのであった。この絶え間なき「往還」の中で、竹内は中国と日本という枠組みを打破し、彼独自の認識方法を築きあげていったのである。（孫 [2005.5: 47]）

つまり、ここで中国や日本は、既存の確固たる、変化することのない政治的共同体としては捉えられていない。むしろ、個人の認識を形作る一つの「枠組み」として捉えられている。これを崩し、作り上げ、そしてまた崩す、という過程を行うことによって、竹内は「独自の認識方法」に到達することにできたというのである。

こういった孫の議論は、竹内の「問題提起」の構造と意義を徹底的に論じ、明らかにしたという点で独自のものとなった。孫はそうすることで同時代的な制約を乗り越え、人々が普遍的に継承しうる遺産として竹内の思想を示すことに成功したのである。この意味で、孫の竹内論は画期的なものであったと言えよう。

しかしここで興味深く思えるのは、竹内の遺産として何よりもまずその思考様式に孫が注目する点である。そしてその結果、他とつながる共同性や公共性を模索する論理としてよりも、まず一番に自己の世界に対する見方を問いたす論理として、だからこそ「自己批判」の論理として「政治」は語られることになる。孫以前も、竹内を通して多くの論者が「政治」を論じてきた。しかし、徹底して問題を個人の内面に還元したという点で孫は

彼らとは大きく異なっていると言えるだろう。

おそらく現時点では最もまとまった、そして優れた竹内読解である孫の論が、このような見解を示していることは、一つの大きな変化を現わしているのではないだろうか。少くとも、「政治」との向きあい方、もしくは「政治」の語られ方が大きく変容していることを孫の論は象徴しているように筆者には思える。それはまた、竹内を通して語られてきた「日本」「中国」「アジア」という政治的な空間をどのように捉えるか、どのように語るか、といった問題が転換期にあることを、象徴するものなのかもしれない。

文献一覧

- *本文献一覧では、竹内論の流れを概観できるよう、日本国内で発表された順に記載している。その際、可能な範囲で発行年月まで記し、文献引用の際もこれを用いることとする。
- しまねきよし (1978.5~12) 「竹内好批判論文・解題」『思想の科学』第六次, 91・98・99.
- 松本健一 (1980.3) 「アジア体験の思想化——武田泰淳と竹内好」『現代の眼』21(3), pp.88-95.
- 松本健一 (1980.10) 「『偏見は楽しいが、無知は楽しくない』——『竹内好全集』刊行にふれて」『朝日ジャーナル』22:41, pp.80-3.
- 溝口雄三 (1980.10~1981.1) 「〈中国の近代〉をみる視点」『UP』1980年10月号~81年1月号, pp.1-10. → 溝口 (1989.6), pp.3-34.
- 鶴見俊輔 (1983.3) 「戦中思想再考——竹内好を手がかりにして」『世界』448, pp.225-39.
- 磯田光一 (1983.9) 「竹内好と江藤淳——戦後ナショナリズムのアポリア」『文藝』22(9), pp.168-176.
- 野沢豊 (1985.10) 「アジア研究の戦前・戦後」in 歴史学研究会編 (1985.10), pp.4-36.
- 歴史学研究会編 (1985.10) 『アジア現代史 別巻 現代アジアへの視点』青木書店.
- 松本三之介 (1986.3) 「戦後思想と竹内好」『世界』486, pp.225-37.
- 太田勝洪 (1986.4) 「竹内好」in 山崎編 (1986.4), pp.261-84.
- 山崎正和編 (1986.4) 『アジアを夢みる』講談社.
- 上村希美雄 (1986.11) 「戦後史の中のアジア主義——竹内好を中心に」『歴史学研究』561, pp.41-53.
- 酒井直樹 (1987.12) 「近代の批判: 中絶した投企——ポストモダンの諸問題」『現代思想』15(5), pp.184-207.
→in 酒井 (1996.5), pp.3-52.
- 溝口雄三 (1989.6a) 『方法としての中国』東京大学出版会.
—— (1989.6b) 「〈中国の近代〉をみる視点」付記 in 溝口 (1989.6a), pp.32-34.
- 桂秀実 (1989.10) 「方法としてのフェティシズム」『季刊思潮』6. →in 桂 (1990.8), pp.32-53.
- 桂秀実 (1990.8) 『小説的強度』福武書店.
- 桶谷秀昭 (1991.12) 「動乱期の思想の風貌——大東亜戦争と知識人たち 6 竹内好」『正論』232, pp.318-29.
- 菅孝行 (1994.12) 「検証・竹内好——見失われた希望としての歴史の再発見のために」『情況』1994年12月号, pp.58-69.
- 大澤真幸 (1995) 「掙扎の無思想——竹内好のナショナリズム」『思想の科学 第8次』31, pp.22-30.
- 今井駿 (1995) 「竹内好の中国論について」『人文論集』46(1), pp.111-137.
- 鶴見俊輔 (1995.1) 『竹内好——ある方法の伝記』リプロボート→鶴見 (2001.3).
- 都築勉 (1995.1) 『戦後日本の知識人——丸山真男とその時代』世織書房.
- 酒井直樹 (1996.5) 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史・地政的配置』新曜社.
- 坂井洋史 (1996.6) 「竹内好と「文学」の断層」『中国』11, pp.29-46.
- 山本直人 (1997.12) 「亀井勝一郎と竹内好——もう一つの「近代の超克」」『東洋大学大学院紀要 文学研究科〈国文学・英文学・日本史学・教育学〉』34, pp.17-29.

特集 1990年代日本の思想変容

- ローレンス・オルソン (1997.9) 『アンビヴァレント・モダーンズ——江藤淳・竹内好・吉本隆明・鶴見俊輔』 新宿書房。
- 代田智明 (1997.12) 「竹内好と武田泰淳——二人の思想的すがた」『颯風』33, pp.40-60.
- 川本隆史 (1998.5) 「民族・歴史・愛国心——『歴史教科書論争』を歴史的に相対化するために」 in 小森・高橋 (1998.5), pp.157-173.
- 小森陽一・高橋哲哉編 (1998.5) 『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会。
- 栗原幸夫編 (1998.6) 『レヴィジョン〔再審〕第1輯——戦後論存疑』社会評論社。
- 鶴岡哲 (1998.6) 「歴史を書きかえるということ」 in 栗原編 (1998.6) → 鶴岡 (2003.12), pp.295-302.
- 三宅芳夫 (1998.10a) 「留保なき否定性——二つの京都学派批判」『批評空間』第二期 19, pp.69-87.
- (1998.10b) 「竹内好における「近代」と「近代主義」——丸山真男との比較を中心に」 in 山脇他編 (1998.10), pp.375-95.
- 山脇直司・大沢真理・大森彌・松原隆一郎編 (1998.10) 『現代日本のパブリック・フィロソフィ』新世社。
- 岡山麻子 (1999) 「竹内好の文学精神——存在と文学」『年報日本史叢』1999, pp.73-119.
- 天野恵一 (1999.1) 「竹内好の「近代の超克」再読」 in 栗原編 (1999.1), pp.175-82.
- 栗原幸夫編 (1999.1) 『レヴィジョン〔再審〕第2輯——超克と抵抗』社会評論社。
- 代田智明 (1999.2) 「近代論の行方——新たに「方法としてのアジア」を」『野草』63, pp.1-21.
- 李京錫 (2000) 「竹内好のアジア主義論の構造及び諸問題」『早稲田政治公法研究』64, pp.227-257.
- 松本健一 (2000.6) 『竹内好「日本のアジア主義」精読』岩波書店。
- 岡山麻子 (2001) 「竹内好の戦争責任論と中国論」『年報日本史叢』2001, pp.127-59.
- 鶴見俊輔 (2001.3) 『柳宋悦・竹内好』筑摩書房。
- 小島晋治・大里浩秋・並木頼寿編 (2001.6) 『20世紀の中国研究——その遺産をどう生かすか』研文出版。
- 代田智明 (2001.6) 「問題としての竹内好・中国問題研究会」 in 小島他編 (2001.6), pp.299-306.
- リチャード・カリチマン (2001.7) 「竹内好における抵抗の問題」『現代思想』29(8), pp.8-15.
- 丸川哲史 (2002.1) 「竹内好「方法としてのアジア」」 in 大澤 (2002.1), pp.164-74.
- 大澤真幸 (2002.1) 『ナショナリズム論の名著50』平凡社。
- 岡山麻子 (2002.6) 『竹内好の文学精神』論創社。
- 丸川哲史 (2002.9) 「冷戦文化論①——竹内好と「敵対」の思考」『早稲田文学〔第9次〕』27(5), pp.4-15. → 丸川 [2005.3].
- 小熊英二 (2002.10) 『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社。
- 藤井省三 (2002.12) 「太宰治の「借別」と竹内好の「魯迅」」『国文学 解釈と教材の研究』47(14), pp.56-65.
- 岡山麻子 (2003.1) 「竹内好の『北京日記』——文学の解体と再生」『社会文化史学』44, pp.1-16
- 丸川哲史 (2003.10) 『リージョナリズム』岩波書店。
- 佐藤泉 (2003.11) 「外国文学研究者の「近代の超克」——河上徹太郎の西欧/竹内好の中国」『日本文学』52(11), pp.40-51.
- 鶴岡哲 (2003.12) 『応答する力——来るべき言葉たちへ』青土社。
- 岡山麻子 (2004.3) 「竹内好の「民族」概念と保田與重郎——戦後における規範形成の基礎づけ」『史境』48, pp.64-78.
- 丸川哲史・米谷匡史 (2004.8・9) 「アジア主義, 「近代の超克」論, そして脱冷戦——尾崎秀実と竹内好」『情況』5(8), pp.6-23.
- 花森重行 (2004.10) 「複数の「憲法感覚」に向けて——竹内好における「憲法感覚」の変容と安保体験」『現代思想』32(12), pp.136-50.
- 丸川哲史 (2005.3) 『冷戦文化論——忘れられた曖昧な存在の戦争の現在性』双風社。
- 孫歌 (2005.5) 『竹内好という問い』岩波書店。
- 溝口雄三 (2005.6) 「『日本とアジア』(1961) 竹内好 (1910-1977) ——今, どう竹内か」『現代思想』33(7), pp.206-209.